

2006. 1月号

# アスリートのための キャリア・トランジション勉強会

Newsletter No. 13

2006年 1月13日

第13回

アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会

## 【目次】

1. 「アスリートの心理スキルは、ビジネスでも大いに利用できる  
～ビジネスで使うライフスキルについて～」  
ゲスト：小林一光（こばやし かずあき）氏 \_\_\_\_\_ 1
2. 第13回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会  
アンケート集計結果 \_\_\_\_\_ 5  
2006年1月13日 勉強会参加者一覧 \_\_\_\_\_ 7  
次回勉強会スケジュール \_\_\_\_\_ 8

第13回目の勉強会は小林一光氏をゲストにお迎えしお話しいただきました。下記、主宰の田中ウルヴェ京の考察として報告いたします。

今回の勉強会ゲストはプルデンシャル生命保険株式会社首都圏第一支社第5営業所長の小林一光氏。

一光さんの経歴を改めて下記に記す。

1965年東京都出身。1988年早稲田大学教育学部卒、大学時代は名門のラグビー部に所属。卒業後はJTBに就職。その後プルデンシャル生命保険(株)からスカウトをされ、1994年28歳で転職。フルコミッションのプロの営業職であるライフプランナーとして入社。入社後10年間の営業成績は常にトップランクで、2002年度には社内業績No. 1になるなどその営業において、数々の伝説を残す。現在では営業所長としてマネージメントでのトップを目指している。

・・・とにかく「静かに熱い」方だ。変な表現には私なりに理由がある。

はじめてお会いしたのは、昨年、2005年の夏。すでに上記のようなプロフィールを仲介してくださった方から伺っていて、「ああ、どんな方なんだろう。トップ営業マンって、バリバリ元気なのかなあ、すっごくキラキラして、プレスレットとか時計がジャラジャラして、派手なネクタイして、、、って感じなのかなあ、それともトップまでいくと、その『次』を始めている人かなあ、、、」

色々想像を膨らませながら待っていた。

「すみません、遅くなりまして、、、」

私たちが待っていたおそば屋さんに入ってきた一光さんの第一印象は、「あ、カッコいい」という外見のいたって個人的印象以外には、まったくもって「ふつうの人」にみえた。というか「ふつうにしていた」。

「ふつうにしていたら」からこそ、興味がわいた。

なぜだろう？いつから「ふつう」にしているんだろう？

営業マンでいらした最初の時期からそうだったのか。

それとも何か節目があったのか。

そもそもラグビー時代のことは、ご自分ではどう捉えているのか。

心のなかに湧き出てくる質問は尽きなかったのだが、その日はまったく別件でのお顔合わせだったので、一光さんに質問などさせていただけの雰囲気ではなかった。単純に雲の上のような人だと感じて「聞けなかった」が本音だ。

ただ。

一光さんがその初日のおそば屋さんでお気づきになられたかどうかは、まったくわからないが、自分にとっては、大きな一歩になった「あ、もしかしたら、この方は、話をさせて頂ける方かもしれない」と思った「きっかけ」がある。

私のプロフィールを他の方が一光さんに説明してくださっているとき。

アメリカの大学院でスポーツ心理学を、、、という話になった。

「最近、アメリカにスポーツ留学をする方々は多いですね」

という話になり。

私はそのとき

「そうですね。でもあまりアメリカ帰りだっていって、アメリカで習ったことを正しいことかのようにいって帰って来る人も多くて。それを日本のスポーツ界ではアメリカナイズされすぎと嫌われることも少なくないですよ」  
というようなことをいった。

一光さんはそのとき、確か

「そうですか、では田中さんはそうならなかった成功例なんですね」

とおっしゃったのか、それとも

「そういうスポーツ界はダメですね」

とおっしゃったのか、正確なご返答は覚えていないのだが、私はその話題の最後に

「ま、そもそも思いつきアメリカナイズされてきて、一番自分が正しいと思って偉そうに帰ってきて最悪なヤツだったのは、まさしく自分なんですけどねー。アホですねー」

というようなことを言った時に、おそばをすすりながら、ちょっと吹き出すような仕草をなされた一光さんを見た。その一瞬、「あ、この人話せるかも」と勝手に思った。自分勝手な理由ではあるが、強烈に思った。

2回目に弊社の代表とともにお会いした時に、それを確信した。

あまりに感激する事柄が多くて、すべての一語一句を現役選手たちに、そしてトランジション中の選手たちに聞かせたら、どんなに役立つことだろう！どれだけ元気づけられることだろう！！と一人で興奮していた。

勉強会のゲストは、皆さん素晴らしい方々ばかりなのに、無償で来て頂いている。

しかも異常に忙しい方々ばかりだ。

一光さんがたとえもしも勉強会には賛同して下さったとしてもお時間的に無理だろう、まったくもってダメもとでお願いメールをしてみたら、偶然に13日だけはお日にちが空いていた。これこそ「神に感謝！」

前置きが長くなったが、以下に勉強会の報告をさせていただきます。

## 「アスリートの心理スキルは、ビジネスでも大いに利用できる～ビジネスで使うライフスキルについて～」

### 1) 一光さんの幼少時代～大学時代:

一光さんは、3人姉弟の末っ子。お二人のお姉様のなかで、自分はオトコー人という感覚がつまらなかったとおっしゃる。

ただ、小学校時代は、勉強もスポーツもできた。

中学では早稲田実業に入学。野球部にじつは入りたかったけれど「根性がなく」、柔道部に。しかしその柔道部に入った理由は、勧誘をしにきた先輩が学年一の秀才。文武両道の先輩にあこがれて柔道を始めたとも振り返る。

中学時代は、柔道が強くて、柔道には「自信があった」。

そして学歴が大事であるということは何となく思っていたので、勉強はやらなければいけないという気持ちがあった。

でも、ご家庭の都合で中学3年からは、ご両親と一緒に住むことができず、住む家を転々とせざるを得なくなり、様々な環境の変化によって、人生のネガティブな時代をお過ごしになる。

中学時代はずっと成績がトップクラスでいたにもかかわらず、それ以来成績も急降下。スポーツ(クラブ活動)もやめてしまい、高校に入ってから「ブータロー」のような生活をはじめた。

しかしそんな時も支えてくれる人がいた。

野球部に入っていた友人のお父様。

友人がいない時もその彼の家に行き、お父様と話すことが多くなった。

「とにかく意識を変えること、おまえだけが苦勞しているんじゃないと言われたんですね。そしておまえは逆に他の私立学校に行っているぼんぼんたちよりも苦勞をしているんだから、絶対に社会に出たら負けないんだ、という気持ちに切り替えろ、と。」

「とても大事なことを言われましたが、やはり、当時はすぐ理解できなくて、、、わかっていてもなかなか意識を変えることができなかった。

「またそのころ、担任の先生の勧めもあって再度スポーツ(クラブ活動)にチャレンジすることになり、高2の途中からラグビー部に入部することになって、それからラグビーをずっとやることになりました。」

興味深いと思った。

この勉強会に来て頂く元アスリートの皆さんは、ほとんどの場合、小さい頃から、一つの競技で大成することを夢見て、その競技だけに専心して、、、というような経験が多いなかで、一光さんの「人生の選び方」は興味深かった。

もちろん人生の選び方といっても、自分のコントロールできない部分で外的環境が変わり、一青年にとっては、どうにもならない不可抗力があったからこそ、そういう人生の選び方をせざるを得なかったわけでもある…。色々当時の小林一光少年を想像していて、ふと変な質問が私の頭に浮かんだ。

「今振り返ってみて、小林一光君という高校1年生でちょっとぐれようとしている生徒をご自身で思い出していただきたいんですが、なぜ一光君を周りの方々がそうやって支えて助言を与えてくださったんでしょう。何かやっぱり光るものがあっただけでしょうか、客観的に考えていただいて。」

一光さんは、「そりゃ、光ってましたよね、名前が一光ですから」というようなイスから落ちそうな「ネタ」を言ってくださった後に、ふっと遠くを見ながらおっしゃった。

「本当にどうでしょうねえ。ただ、両親の愛情を常に感じていたため、基本的には非常に素直な子供だったところがよかったんじゃないでしょうか？それで、いろいろな人の話を真剣に聞いていましたね。とにかく今の状況を打破したいというのがすごくあったので、真剣に人の話を聞いて、これは今の営業でもすごく生きているんですけども、営業って話すことより聞くことの方が大事なんですけど、そのころから聞くという姿勢を学んだような気がしますね。この人は真剣に僕に話をしてくれているなというのが分かったと、そこに対しては徹底的に聞いていましたので、そういう方々はかわいがってくれましたね。」

両親に対する「こうありたい」というセルフイメージや、逆境対処能力が伺える言葉だった。

ラグビー部に途中入部するのは、やはり気が引けたそう。

しかし、せっかくの先生からの助言。「期待にこたえたい」という信条があった。

「ラグビーは最初まったくダメでした」

とはおっしゃっているが、その高2ではじめたラグビーを結局、早稲田大学教育学部に進学された後も、悩んだ末に、続けることになる。

早稲田大学ラグビー部という名門のなかで、一光さんは、どんな選手としてのアイデンティティーを持っていたのか。

「大学4年間は真っ二つですね、1年、2年はまったくラグビーをやっていた気がしません。逆に3年、4年はもうどっぷり、本当にラグビーに浸かったなという感じです。」

当然、早稲田ラグビー。小さい頃からラグーマンとして育てられてきたような学生も多かった。そもそものスタートラインが違うことは感じていたので、レギュラーになることは無理だと思っていた。

名門ラグビー部での選手としては箸にも棒にもかからないと思っていたが、そんな学生時代にも成功体験があった。貴重だった、とおっしゃる。

「成功体験を少しだけつかめたんですね、大学4年ぐらいのときに。大学1年、2年のときは本当に箸にも棒にも引っ掛からないという、当時部員が160名ぐらいいましたし。1年生のときはいつも5軍とか、6軍とかでやっていて、本当にこれでやっている意味があるのかなみたいな感じでした。ところが2年生の最後にすごい悔しい思いをしたんです。当時はよく部内試合というのがあり、1軍対2軍とか2軍対3軍の試合があったんです。あるその時僕は4軍にいて、3軍に僕の同級生がほとんど出ていて、その3軍の選手にめちゃくちゃばかにされたんですね。「こんなへぼみたいなやつがいるチームに俺たち負ける訳がない」みたいなことを言われて、それがきっかけで、そこからもう絶対にこいつらを見返してやるという気持ちになって、やっと初めて本気でラグビーをやろうと思ったというか。そしてそれから自分で言うのもなんですがメチャクチャ努力して気合入れて。それで4年生のときに、こんな僕でも、ラグビーのジュニア選手権という2軍の大会の補欠になることが出来たわけです。そこで努力すればそこそこいけるなという、ラグビーは苦手だとふたをしていた自分自身の眠っていたアスリートの本能に少し火がついたというか。」

一光さんは、スポーツを通じて、大事な成功体験を経験し、そして「自分でもやればできる」的な自己効用感を感じることができたそうだが、一方で、これもまたスポーツで感じることでできる大切な「人間不公平感」も感じることができたようだ。

「努力しても報われない世界を初めて知ったというんですかね、ラグビー部に入って。すごく仲のいい同期がいて、彼はたぶん僕の同級生の中で、4年間一番練習したと思うんですよ。そいつが4年生の春にやっとレギュラーをつかんで1軍になったんですが、そこへ当時天才的な1年生が入ってきて、結局夏合宿の3日目にレギュラーの座を奪われてしまうんです。ある程度天才的な能力のある人が努力をしたら、そこそこの人が努力をしてもやっぱり勝てないんだなというのをまざまざと見せ付けられたというか感じましたね。」

この不公平感は、非常に大事だと思っている。スポーツではリアルにそれを見せつけられることがある。私自身、選手時代、そしてコーチ時代、その不公平感をいかに受容するか、あるいはいかに指導するか、が難点であり、その部分の指導を正しくすることによって、選手には、引退後にどんな社会に出ても自立し、たくましく生きていけるような「ライフスキル」が養われるとも思っている。スポーツで一番学べる、マイナスのように見えて、実は

とてもプラスなところが、この不公平感とも思っている。人間、努力だけではだめだし、努力をどんなにしてもかなえられないものというのは存在する。当たり前だ。反面、その不公平感を受容した後に、唯一、人間ができることは「努力である」という不条理がある気がする。しかし、その「努力」にも色々な「努力」がある。無我夢中の努力をよく「真面目な選手」はやりがちだ。まさにこういった努力は単なる自己満足、あるいは「コーチに認められたい」だけに過ぎない無駄な努力だ。

一光さんは、スポーツで学んだことをその後のキャリア、あるいは人生につなげて、とても説得力のあることをお話くださった。

「無我夢中に努力するだけだと弱いんですね。やっぱり自分というのが何に対して強いかということ、客観的に見られる自分がない限り、ビジネスとかでも成功できないと思うので、それが学べたのが大きかったです。だから僕が早稲田ラグビー部で学んだ点は大きく2つで、1つは目標設定をできないと勝負には勝てないということ。

僕は絶対にラグビー部でレギュラーになるんだという目標設定ができなかった。だから毎日毎日、努力をしているつもりなんですけど、その努力が情性に流されちゃう、その目標に対してのストレートな努力じゃなかったもので、結局試合に出ることができなかった。

もう1つは、努力しても報われない世界を学んだことですね。それで逆に自分が社会に出たら、一番自分が自信の持てる世界で、誰にも負けぬ努力をしたら絶対に勝てるということ、この2つを知って卒業できたのが一番大きかったですね。」

## 2) 社会人になって

大学ご卒業後には、JTBに入社された。

「JTBに入ったときは、他の同期(ラグビー部時代の同期、JTBの同期)に絶対に負けたくなかった。」社会に出たこれからは本当の勝負だと思ってましたので。だからアスリートとしてはいまいち芽が出なかったけれども、ビジネスというか、これからの人生に必ず勝ってやろうということもあったので、自分が大学時代に学んだことを逆に今度は社会に出たらやってやると思っていました。運よくJTBの他の同期が会社に入って満足している、目標が入社することだったようで、入社してからこうしようなんていうのはなかったのではないのでしょうか。僕は入社したときから社長になりて来ましてなんて言うていましたので、社長になるためにはどうしたらいいんだということを、1年目から真剣に考えていた。今度は目標設定がしっかり出来ていたので負けるわけがないと思っていました。」

そう真剣に当然のように語る一光さんを横で見ている、なんだか気持ち良かった。

私は「勘違いな夢」とか「あり得ないこと」を真剣に考えていることが大好きだ。

勘違い、とか、あり得ない、というような基準は、誰が決めるものか。

一般論なんていうものは、自分が「当てはめない」と決めてしまえば、何も当てはまることはない。

同時に、ふと思った。

おそらく一光さんは、選手としては、「スターになれなくて」良かったのだと。

ラグビーで大成しなかった、スター選手にはなれなかったことが、結局意味があったのだと。

「たぶんラグビーでも1試合でも2試合でも出ていたりしていたら、その余韻で僕はあの日本一のラグビー部の選手ですみたいな、それをたぶん引きずっていたでしょうね。もしそうであるなら、ビジネスの世界に入ったときに後れを取っていたでしょうね。逆に、今思えば、ラグビー部のときに今の気持ちで真剣にやっていたら、少なくとも1試合か2試合は出ていたのではという自信があるんですけど、逆に1試合か2試合出た、その余韻を引きずって、昔の俺はなあ、、、と言って、昔の過去の栄光を引きずっている自分と、まったくそのときはだめだったけど、今ビジネスでそれなりの成果を見せている自分とどっちがいいかなと思うと、間違いなく今の自分の方がいいという結論に達する。JTBのときは営業成績もよかったし、本当に当時、もしかしたら社長になれるんじゃないかなと思っていましたけどね。」

こう語る一光さんは、とつても謙虚で温かい。全然嫌味じゃない。むしろ、とてもカッコいい。

そしてプルデンシャルに転職するのが28歳。  
なぜ転職されたのか。

「一番大きな理由は、自分の可能性を試したかったということです。アスリートの気持ちが残っていて、大学時代チームが日本一となったのですが、僕自身はレギュラーではなかった。それで社会に出たら何とか自分の力でトップになりたいというのがありました。それでももしかしたら営業の世界でだったら自分も、、、とおぼろげに思っていたら、本当にスカウトが来た。やっぱりこれも運だと思うんですけども、初めは生命保険の営業なんて冗談じゃないと思っていたんですけども、C=Cという世界に憧れたのと(C=C、コントリビューション contribution=コンペンセーション compensation)、うちは毎年毎年、営業マン全員の順位を発表しますので、あなたでも1番になるチャンスがありますとか言われたことですね。」

運だと言われたところで、ふっと思い出した。

最近、学生で就職活動などを行っている方々が、よくキャリアトランジションについて、訪ねてこられたりする。自分には運がない、とか、運のいい人には叶わない、というような言葉を聞くと、私はいつも頭の中でスイッチがONになってしまって、熱くなってしまう傾向がある。「運なんて、本来誰にでも来るもんだ。自分の運に気づかないのは、単純に怠慢か、運に気づけない能力不足だ」と。つまり一光さんは「運良く」と謙遜しておっしゃるけれど、それは運なんかではない。努力をしている、あるいは真摯に生きている、あるいはギラギラと生きている一光さんを周囲はどこかで必ず見ている、その一光さんの人生の経過のなかで、「運」というものは、必然的に訪れるのだと。

一光さんはおっしゃる。

「運というのは自分でつかむものですから、運がいいというのは、結局は自分で運を引き寄せているだけなんだと思います。よく高橋尚子さんがおっしゃっているように、本当にチャンスと時間というのは全員平等に与えられていると思います。チャンスと時間というのは、必ずみんなに平等なんです。そのチャンスをつかめるか、時間を使えるかという、そこだけが勝負だと思えますね。だから運というのは、結局は自分で呼び込んでいるものだと思わすので、必ずこうしたいとかこうありたいとか願っている人が、それに対してストレートに努力していたら必ず運が来る、それに気付くんですよ。だから運がないとかって言う人は気付かないだけなんです。チャンスと時間が平等に皆さんにあつて、チャンスが目の前に流れているのに、つかめないでいっちゃうんですね。」

運が強い人間＝精神的にも強い、と思われがちでもある。

しかし、実際、一光さんは、「自分は大学時代は本当に精神が軟弱だった」とおっしゃっていた。

ではなぜ、今は、あるいは社会人になってからは、軟弱じゃなくなったのだろう。

何が一光さんを変えたのだろう。

「まずは JTB に入って、営業で結果が出続けたことですね。自分が決めた目標によって、それに向かって努力することで勝ちぐせが、毎日毎日やっていると、すごいちっちゃな勝ちぐせの積み重ねなんですけど、今まではいつもだめだ、だめだと思っていたのが、今度はできる、できると、毎日の活動の中で、本当にちっちゃい積み重ねだったと思います。僕はそういうところから変わって行って、結局、最終的に 10 年ぐらいかかりましたけど、揺るぎない自分自身に対する自信ができたとか、その勝ちぐせというのはすごく大事なんですね、自分に対する。何か大きなことじゃなくてもいいと思うんです、本当に小さいことで。ただ、その勝ちぐせも目的がなかったら絶対にできないと思います。」

勝ち癖。

私の大好きな言葉だ。

ちっちゃいことからでも、勝ち癖はつけられる。

勝ち癖がつくと、何もかもうまく行き始める。

それは本当だ。実感する。

しかし。

勝ち癖をつけてしまって、成功し続けると、人間には落とし穴が待っていることが多い。

「勘違い」だ。

この勘違いは、誤解しないでいただきたい。「勘違いな夢に邁進する」ときの「勘違い」とは違う。自分自身に対する「勘違い」だ。これは厄介だ。ネガティブスパイラルの入り口と私は思っている。

「当時は、すごい嫌なやつでした。まず大きな勘違いをしていたと思います。プルデンシャルという会社は営業会社なので、成績がどんどん上がるとちやほやされるわけですね、社内だけなんですけど。それで自分が成功者みたいな気持ちになってしまって。当時は悩んだり考えてる暇などない、とにかく契約さえ預かっていれば成功できると思ってましたので今思えばまったく自分を振り返る余裕がなかったんですね。」

C=Cであったので、当然収入も増える。キンキラキンの時計をしていたり、派手なネクタイをしていたりという時期があったという。

しかし、転機が来た。

「当時、営業成績で 5 年間すごい高い目標を立てていて、それがクリアできたんです。私的にも 5 年間でこれだけやりたいという、夢を描いて、それも達成できてしまった。さすがに目標をすべて達成できてしまったので、その瞬間に次の目標がなくなっちゃったんですね、一瞬。よく金メダルを取られた方が言いますよね、金メダルを取った瞬間に灰になっちゃうとか。早稲田ラグビー部の今年のキャプテンも言っていましたが、もう優勝した瞬間にうれしくもないですと、こんなものかと、ほっとした気持ちだけ、次に何をしたいのか分からないと。まさにそんな感じで、5 年間本当に全力で努力した結果、目標が達成できたので穴があいたというか、ふっと。」

そんなときにある月に、生まれて初めて断られまくったんです。ある社長には「もう出ていけ」と、「お前に経営の何が分かる、出ていけ、二度と来るな」と。それでまったく売れなくなってしまうんです。どうしようと思っても、でも変なプライドがあって職場の同僚には悩みを告白できないんですよ。本当はものすごく傷ついていて、ものすごく悩んでいて、誰かに聞いてほしいんだけど。でもある時勇気を振り絞って尊敬する先輩に思い切って聞いてみたのです。実はまったく売れないんですよ。どうしていいかまったく分からない、このままいったら僕、辞めるかもしれませんと言ったときに、その先輩が一言、「鏡、見てみ」、自分の姿を鏡で見ると、客観的に。その一言ではっと気づいたというか。」

人間としてどうあるべきか、、、。

気づかされたそうさ。

人間的な成長を考えさせられたのだそうさ。

そんなとき、あるきっかけが一光さんのキャリアに対する姿勢を大きく変えたようだ。

「僕の大学時代からの友人が契約して3年か4年したら、いきなり失踪してしまった。携帯もどこに電話をしてもつながらない。もちろん保険料も引き落としができない。普通掛け捨ての保険だと、保険料が2ヶ月続けて引き落としが出来ないと、失効といって解約扱いになってしまうのです。ただ彼の契約は掛け捨てではなくて貯蓄性のある保険でしたので、保険料を解約返戻金から立て替えることができたんですね。そして2年ぐらい音信不通だったある日1枚のファックスが僕の会社に流れてきて、その一番下に小さく何々君が亡くなりました、冥福をお祈りしますと書いてあったんですよ。目を疑ったんです、えっ、まじ？ と。その時は直感で自殺だと思いました。

それで奥様に会いに行ったんですね。奥様にお会いたところ、奥様もびっくりしてるわけです。僕が急に現れて、「実は」と話し始めると、うそでしょうと。そんな、たぶん保険料も支払ってないのに、あなたの保険が出るわけないと。いや、実は出るんです、こうこうこういう理由で、と言ったら、奥様はすごく号泣されて、その奥様がおっしゃったのは、これで救われましたと。もちろん経済的に救われたのは事実だが、それより何より私とか息子を置いて失踪して、その後自ら命を絶った主人の話なんか絶対に子供にできないと。それで私たちに何も残してくれていない、愛情のかけらもない、そんな父親のことを息子には絶対説明できませんと。だけど今日、一光さんが現れてくれたので、これはいつか必ず息子に話せないと。パパはいなくなっちゃって自ら命を絶ったけれども、私たちのためにこんな宝物を残してくれたんだと。実は彼が入っていた生命保険というのは今でもうちの会社から毎月いくらかお支払いをしています、もう10年以上です。そんな保険に入っていたので、毎月毎月パパが天国から仕送りしてくれているんだよというふうに説明ができるんだというようなことを奥様から聞いて、これだと思ったんですね。

生命保険というのは、保険の契約をお預かりするというのは、1つのほんの入り口の仕事でしかない。こうして保険金というものをお届けするというのが本当の僕らの仕事だと。彼が僕に託してくれた男としての威厳、父親としての威厳を僕は守れたということですね。友人の男としての威厳を守れた、この仕事は絶対にやめられないというふうに固く決意しました。

というのは、僕がその時会社になければそのファックスは捨てられていたでしょう。もう小林というのはいないからと捨てられていました。捨てられていたら、その一番下に書いてあった彼の冥福をお祈りしますというのを誰も見ていない。ということは、僕から入った保険もいつかは絶対に失効する。ということは、今奥様にもお子様にも、彼が僕に託してくれた気持ちを届けられなかったんですね、僕がいなければ。

だから今保険金の不払いという問題が起こっていますが、そんなのは言語道断で、僕はこの会社に長くいて、お客様のそばにいて、保険金を届けるというのが最大の使命だともものすごくそのときに強く感じて、それが僕の営業マンとして次のステップに行かせてくれたと思います。」

人生は意味を持ち始めた瞬間から、とても大きなエネルギーを持つ。  
そう信じている。それを実感させられるお話だった。

最後にいくつか質問するなかで、「スポーツしかやってこなかった」若い選手たちに、何かお言葉をいただきたいとお願いした。

「スポーツはすべてに通ずると思うんですね。だから人生そのものだと思うし、僕みたいなそういう営業の世界とか、あとはどこの会社に入っても目標とか、やらなきゃいけないことが必ずあると思うので、そのときにスポーツで学んだことというのは、必ず役に立ちます。すごいアドバンテージだと思います。壁を乗り越えてきたとか、いろいろな目標に向かって、何でここまでできたんだろうという努力をしたとか、負けたときの悔しさであるとか、あとそれを客観的に自分で今までのアスリート人生を分析できれば、なぜ勝ってなぜ負けて、どこが自分の強みで、どこがというところが分かれば、それと次の世界で大事なことはスポーツの結果を引きずらないことでしょうね。過去の栄光に惑わされない、過去の栄光じゃ飯が食えないですからね、アスリートを卒業したら。昔、私はこうだったというところを思ってしまうと、結局そこに戻ってしまうので、一度すべて捨てなきゃだめなんですね。捨てることから次が始まる。客観的に自分を冷静に分析した後に、今までのことをすべて捨てて、捨てないと人間って入ってこないですから、どんどん過去は捨てて、新しいものを取り入れていっていただければ必ず、アスリートで特にトップを極めた方だったら必ずどんな世界でも成功できると思います。」

まさに過去の栄光を引きずってもんもんとした過去がある自分としては、非常にどきっとする言葉だった。

最後に一光さんの好きな言葉を教えて頂いた。

僕の座右の銘は「受けた恩は岩に刻み、与えた情けは砂に流す」です。

じつは、この言葉は、私の会社の「座右の銘」でもある。

思わず嬉しくなってしまった。

勉強会を共同で主宰している重野弘三郎氏も最後に「本気」とは何かを考えさせられた、とお話くださったが、まさに私も本気というものをすごく感じた。

「この今持っている俺の本気は本物か」という言葉を座右の銘にしていっしょやるのが、ノルディック複合の荻原健司さんだ。彼はいつも本気と言いながら本気じゃないだろうと言って、自分の本気をいつも確認しながらやっているというような話をしてくださったことがある。

今回の勉強会で私が感じたことは、やはり「長所をどれだけ知っているか」、そして「短所をどれだけ知っているか」。でもその短所を補って長所と同じにすることが時に危険であると。

つまり短所は短所で、もちろんそれがもっとマイナスになったら困るけれども、短所を受容しながらも、より長所のところで輝けるためにもっと長所を本気で伸ばす。一流とは、超一流とはそういうものかと。そして、それはス

スポーツでもビジネスでも通じるのではないかと。

そして最後やはり、GENERATIVITYだ。この勉強会では何度もこの言葉を言っている。

「後輩に何かを指導する」とか「社会貢献」であるとか、あるいは「自分が世間で役に立っている感」というようなものが、人間のモチベーションの根源であるというようなことだ。

なぜ生きているのか、なぜ生まれてきたのか、、、。

自分の生まれてきた理由、自分の過去の栄光の「理由」、、、、。

そういった「自分という人間に、この人生が与えられた理由」がGENERATIVITYと交わった時、そのときには、どんな人間でも飛躍することができ、その飛躍こそが、大きな社会貢献となる気がした。

一光さんは、勉強会の後、私に助言して下さったことがある。

「捨てること」。

極めたら、あるいは、極めた、とか達成した、と思ったら、次に努力すること、勇気を持ってすべきことは「捨てる」ことだと。

捨てることを日々できれば、こんな大事な自己成長のカギはない。

難しいことで、本当に難しいことなのだけれど、勉強会で教えていただいて以降、自分の目標の一つとなっている。

(田中ウルヴェ京)

---

## — 小林 一光 プロフィール

---

1965年東京都出身。1988年早稲田大学教育学部卒、大学時代は名門のラグビー部に所属。

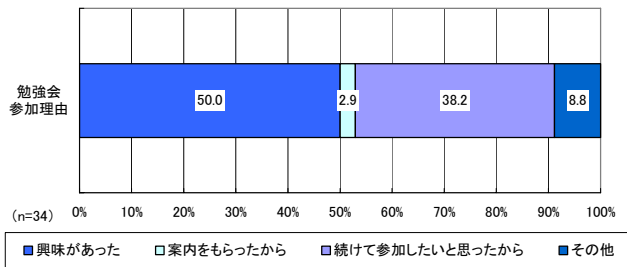
卒業後はJTBに就職。その後プルデンシャル生命保険㈱からスカウトをされ、1994年28歳で転職。フルコミッションのプロの営業職であるライフプランナーとして入社。入社後10年間の営業成績は常にトップランクで、2002年度には社内業績No.1になるなどその営業において、数々の伝説を残す。現在では営業所長としてマネジメントでのトップを目指している。

---

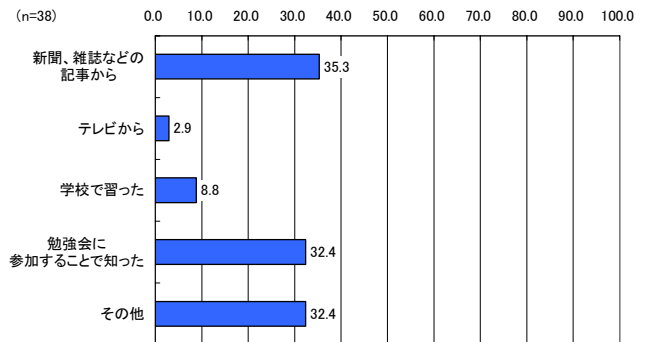
## 2. 第13回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会 アンケート集計結果

アンケート総数：34

### 1. 勉強会参加理由



### 2. 興味、関心について



### 3. 勉強会はどうだったか。

- 自分をつき動かす核となるものが、何か（役立ち観、価値観）であることを再認識した。
- 先日、大学楽日一選手権（早稲田 VS 関東学院）を見たばかりでしたし、堀越君とは大学学部の同級生でしたので、SHの方のお話を伺ったとき、感じ入ってしまいました。
- 初参加です。興味深い話を聞くことができ感謝しています。多少、思うことはあるのですが、短時間でまとめることができません。田中さんの司会がうまいなー。
- 非常に良かった。最後の重野さんの言葉と同じく、プロに会えたと感じました。
- 何がキッカケで自分の能力や進むべき道が照らされるかわからないものだと痛感いたしました。
- 有意義なお話が聞けてとても良かったです。進行もすばらしかったのですが、Q&Aの時間はもう少し参加者に与えて欲しかったです。進行からの4つの質問は多すぎます。
- 非常に勉強になりました。特にビジネスの世界に入ってから行動や意識のお話が参考になりました。
- スポーツ選手の困難に対する反発係数、目標、精神性をキャリアカウンセリングに融合できるのではと感じました。また、目標設定の方法は共有するのだということが感じた。非常にすばらしいお話ありがとうございました。
- とても興味を持ちました。現業務に通ずるところが多くあった。
- 目標設定の重要性が腹に落ちました
- トランジション後、あるいは、別の世界で別の人生を歩んでいるアスリートは、仮にアスリートを引退しようとしている人と共に働く、共に活動するとなった際に何を見るのか？について知りたいと思いました。
- 今までと違った観点からのゲストですが、アスリートとビジネスパーソンのつながりの勉強になった。
- ビジネスの世界で活躍されている元アスリートの方の話はとても有意義なものでした。目標設定の重要性、何よりも強い意志を持って取り組むことなど参考になりました。
- とてもすばらしい話をありがとうございました。
- ビジネスマンの観点からの話は参考になった。
- スポーツを通じて得た経験をいかに人生の成功への経験にできるか。改めて客観的（分析）できることが求められる気がしました。スポーツバカに終わらない為に。
- 大学時代弱かったという言葉が励みになりました。どの道でも「プロ意識」というのが大事だと思った。
- スポーツ関係者としてではなく、一人の人間として大変勉強になりました。ビジネスに限らずスポーツに限らず、一人の人間として成長することの重要性、必要性を強く感じました。
- ゲストのプロフィールを見てもっと固いビジネスの話が多いかと創造していたが、いい意味で想像を裏切ってくれた。
- とても勉強になりました。ありがとうございました。
- 今回はアスリートの為というより、自分のためにいい話を聞かせていただけたと思います。大変有意義でした。ありがとうございます。
- 自分にとって非常に衝撃的でした。失敗したときの経験、そこから立ち直ったかなど参考になりました。生きるヒントを頂いた気がします。ありがとうございました。
- 大変に参考になりました。小林さんの人間としての成長を目指されている姿勢に感銘を受けました。講演会と想像していましたが、こういう座談もよいですね。
- アスリートのセカンドキャリア支援はまだまだ足りないと思います。私がアスリートのセカンドキャリアについて興味を持つ前は、トップアスリートのその後の人生を考えたことはありませんでした。支援の方法を考えることももちろん必要だと思いますが、キャリアトランジションについてより多く

の人々に知ってもらうこともとても重要だと考えます。直接何かをすることがなくても、一般の人々がそのことを知っているかどうかではアスリートを取り巻く環境が変わってくると思いますから。

- 元アスリートでビジネスに進んだ方のお話は新鮮でした。
- 大変参考になりました。ありがとうございました。
- 大変身近に感じました。特に『弱い自分から、小さな目標に向かって価値癖を付けていくことが自分を変えていくことが出来た』という話に納得。『自分の長所を知れ』も納得。
- さまざまな気づきや学びがありました。とても良かったです。
- “印象：JTBからプルデンシャルに転職した際の「たまたま体験」は、まさに経営学でいう「計画された偶然性（ブランド・パップンスタンス）」そのものであり、こうしようと思うことを具体的な行動によって、そう思うことを導くということがいえると思う。
- 質問：学生時代でもビジネスの世界でも、ライフチャートにも出てくるような「マイナス体験からプラス体験へのトランジション」が実現できたのは、どのような価値感（value）のストレッチがあったのでしょうか？
- ついでに：田中さんの対談のときの声が、誰かに似ているなあ。。と考えていたらそうだ、黒柳徹子さんだと気がつきました。”
- 非常にビジネスパーソンとして参考になりました。個人的ですが、ラグビーの強い高校にいたり、保険は同じ会社にお世話になっていたり、シンクロ親しみやすかったです。アスリートというより、何かをしっかりとがんばり、苦勞もしてきた方の貴重なショーケースを見せていただいた感じです。
- とても面白かったです。小さな勝ちグセを積み重ねていくことが大事という言葉が印象に残った。
- 大変面白かったです。もっと多くの方に聞いてもらいたい。ぜひ職場で講演をしていただきたい内容でした。
- モチベーションがとてもあがりました。それが今日の一番の成果です。ありがとうございました。

#### 4. 日本のセカンドキャリア支援の現状

- 寒い状態ではないかと思えます。特に野球選手のセカンドキャリアは限定的でひどい。何とかならないかと人事ながら思えます。
- この状態を指導できない教育が悪い。機会（人に教育する場）があれば、積極に行きたい。
- 明確なシステムやルートがないので皆さん苦勞されているという印象
- 活かしきれていない。社会も本人も。
- 他国に比べて相当に遅れている。またそれが原因でスポーツの強さにも影響している。
- まだ始まっていない。重要性が認識されたフェーズ。
- アスリートのセカンドキャリア支援は、アスリートへのただの甘い支援だという声が多い。（なぜアスリートだけ支援するのかという意味）まだまだアスリートのキャリアの認知が低いと感じている。
- まだまだ未整備だと感じています。もっと広がっても良いマーケットだと思います。
- 以前に比べるとご本人たちの意識も変化してきていると思えます。
- いくつかの機関がアスリートのセカンドキャリア支援に取り組んでいるが、日本のスポーツ界全体で統一したプログラムを作るところまではまだ成長していないように思う。
- 不足しています。
- 企業は見返りメリットがなければ投資しないので、アスリートを採用する・支援することは、その企業に役立つすぐに役立つなくてもいずれ。。というのが必要だと思います。
- 実態を知らない為軽々しくコメントできませんが、選手当人任せになっているのではないのでしょうか。あるいは、所属企業などの組織や人脈に依存しているのではないかと想像しています。
- アスリートの場合、セカンドキャリアへの移行期が早いですが、セカンドキャリアはアスリートに限ったことではないと考えます。
- すみません。コメントできるだけの情報・知識を持っていません。
- 単純に機会が少ないように感じます。変にフォーカスされる必要はないと思いますが、等身大の姿がドキュメンタリーに伝わっていけばよいと思います。また、各社・各団体など、いろいろ取り組まれていると思いますが。矢の束なった感覚はないと思います。
- 選手自身や指導者が考えたり気づきを得られる機会（きっかけ）がもっと増えてくると良いのではないのでしょうか。

#### 5. 今後の勉強会にて議論したいこと

- キャリアデベロップメント、ストレスコントロールなど
- 反発係数、精神性、目標、世代の特徴
- 選手の話聞いてみたい。
- トランジションの成功と失敗の事例（本人から）
- 現役トップアスリート
- トップアスリートが考える働くということ

- 様々なタイプの事例を聞きたいです。
- キャリアトランジションといえば、欧米から来た言葉であると思いますが、例えば米国におけるキャリアトランジション対象、アスリート対象でもよいと思いますがそういったものを知りたい。
- 中高年の今後の価値ある生き方。
- セカンドキャリアをまさに実践されている方、複数名のパネルディスカッション。アスリート周辺市場についての概論
- 学生選手のキャリアトランジション（就職との関連 etc）

## 6. ご意見

- 勤務する会社で所属する部門が分社化することになり、その人事部におります。
- すいません。今は具体的に何も思い浮かびません。考えておきますので期待してください。
- Jリーグのキャリアトランジションなど（プロリーグ）の指導例を知りたい。
- セカンドキャリア支援というものを、アスリートの為だけでなく、アスリートであったからこそその視野や能力を社会で活かしていただきたいと思いました。それが何より阿蘇リーグのセカンドキャリア支援になると思います。この勉強会はその確かな一歩だと思えますし、続けていただきたいです。
- 成功例、失敗例、含め経験の方のお話を聞くのが一番効果的だと思うのでそういう機会をできるだけ増やしていくのがよいのではないのでしょうか。
- 地道に純粹に行っていくこと
- よりビジネス色を強める
- ビジネスとして展開すべきと思います。
- 応援させていただきます。
- マスコミの利用？
- すいません。ちょっと浮かばないので。
- アスリートの人はすごいなあ、と思うんですが、ある意味俗世から離れてしまうリスクを感じました。それだけ一方への本気練習などはすごいことですが、周囲の理解・応援が本当に必要だと思いました。
- 「ニート、フリーターなどのキャリアトランジション、曖昧な地盤、目的などが不明確な人の気持ちはどうやったら変わっていくのか」を少し考えてみたいです。
- トップアスリートだけではない、多くの競技経験者が、キャリアトランジションというのを知り、考えることでスポーツスキルをビジネススキルに適應していくことで、人材市場が活性化すればすばらしいと思います。そのことを考えれば、広瀬さんがスポーツマンシップの普及でやっているような、企業からの寄付 etc による小冊子配布プロジェクトは有効ではないかと思えます。勝手な意見を失礼いたしました。（も可能？）

### 2005年1月13日 勉強会参加者（敬称略）

安部篤志	石黒雅弘	上田昌史	大内香乃	大浦征也	大西修一
小椋将樹	織部みゆき	影井宏秋	我満晴朗	川原篤人	河原優子
久保悠也	倉成隆	後藤聡	小林智香	小松英美子	木幡日出男
齋藤憲一	坂口慶樹	佐瀬毅	杉田友秋	杉本達朗	相馬浩隆
高橋裕幸	但野秀信	田畑則子	堂田政志	永松旬	濱野憲一
福島規久夫	古川美和	松尾順	松尾康男	三宅守	和田直子

**第14回勉強会**  
**2006年4月20日(木)18:30~20:00**

ゲスト  
**小林 至 氏**

福岡ソフトバンクホークス株式会社取締役  
福岡ソフトバンクホークス・マーケティング株式会社取締役  
江戸川大学社会学部 助教授（専攻 スポーツビジネス）

テーマ  
**トランジションを支えてきた源泉**

場所  
**ミスノエスポーツ**

---

事務局: 有限会社MJコンテス

東京都港区白金 4-13-4-1F

TEL 03-3447-2890 FAX 03-3447-2893

田中ウルヴェ京

清水栄子 宮本純

ご意見・ご質問などございましたら事務局までお問い合わせください。